神戸大学　大学教育推進機構 『大学教育研究』 第 25 号　2017 年 3 月：43－62

戦時下における私立女子専門学校と同窓会の関係性

The Relationship between Japanese Private Women's Colleges
and their Alumnae Associations during the Asia Pacific War

原　裕美（神戸大学大学院国際協力研究科　博士課程後期課程）

要旨

本稿の目的は、1941 年から 1945 年までの太平洋戦争下における日本の私立女子専門学校とその同窓会との関係を、同窓会活動と私立女子専門学校の同窓会に対する関与状況から明らかにすることである。分析にあたり、神戸女学院専門部、同志社女学校専門学部、梅花女子専門学校、金城女子専門学校とその同窓会を考察の対象とした。分析にはこれら 4 校とその同窓会の所蔵文書、学校史、広報物を用いる。その結果、戦時下における私立女子専門学校の同窓会は、①戦争遂行のため、②生徒・卒業生のため、③母校を支援するための活動を展開していたことが明らかになった。戦時下の同窓会活動の特徴は、出征家族や軍への慰問・同窓会館の徴用・詔書や戦況に関する記事の同窓会報への掲載である。戦時下であっても、同窓会は卒業生間の親睦を図り、母校に対する財政支援を行い、卒業生と母校を支えた。卒業生は娘を母校に入学させたり、教職員として働くことで母校を支えた。私立女子専門学校側は、校長や教員が同窓会に関与することによって卒業生とのつながりを保ち、同窓会活動を支えた。このように、戦時下には私立女子専門学校と同窓会と卒業生との互恵関係が構築されていた。

１．問題背景と研究課題の設定

本稿の目的は、1941 年から 1945 年までの太平洋戦争下（以下「戦時下」という）における日本の私立女子専門学校とその同窓会との関係を、私立女子専門学校の同窓会に対する関与状況や同窓会が行う活動内容の分析によって明らかにすることである。本稿では、(1) 戦時下における私立女子専門学校の同窓会活動はどのようなものであったか、(2) 私立女子専門学校は同窓会にどのように関与してきたか、(3) 卒業生にとって母校とはどのような存在であったか、を中心に考察を進める。本稿が焦点をあてる 1941 年から 1945 年までの戦時下においては、戦況によって学徒動員や学生の修業年限の短縮が行われ、私立女子専門学校はそうした政策に次々と対応していかなければならなかった変化の激しい時代であった。一方で女子学生の数は増え続け、女子高等教育の拡大期でもあった。こうした私立女子専門学校を取り巻く環境が急激に変化する時代、いわゆる非常時ともいえる時代の私立女子専門学校と同窓会との関係性の分析によって、私立女子専門学校における同窓会の歴史的意義の究明を試みる。それでは、具体的に戦時下における女子高等教育の全体

的な状況と、同窓会に関する先行研究の動向を取り上げて、本稿の研究課題を明らかにしよう。

1941 年 12 月 8 日、日本は米国及び英国に宣戦布告し、真珠湾を攻撃して太平洋戦争に突入した。当時の日本は、国家総動員法、国民徴用令、物価統制令などが実施され、国民が総力をあげて戦争遂行に集中する必要があった[1]。表 1 に 1938 年から 1945 年終戦までに発令及び制定された主な勅令・法律を示す。

表 1　1938 年から 1945 年までに発令・制定された教育に関連する勅令・法律

年月日	勅令・法律
1938 年 4 月 1 日	国家総動員法（法律第 55 号）制定。
1939 年 7 月 8 日	国民徴用令（勅令第 451 号）公布。
1941 年 10 月 16 日	大学学部等の在学年限又は修業年限の臨時短縮に関する件（勅令第 924 号）公布。 1941 年度卒業者の 3 ヶ月短縮が決定される。
1941 年 11 月 22 日	国民勤労報国協力令（勅令第 995 号）公布。 学徒は工場などに年間 30 日以内の勤労奉仕が義務付けられる。
1943 年 6 月 25 日	学徒戦時動員体制確立要綱（閣議決定）。 教育錬成内容の一環として学徒の戦時動員体制を確立し、 有事即応体制の確立と勤労動員の強化を指示する。
1943 年 10 月 12 日	教育に関する戦時非常措置方策（閣議決定）。
1944 年 1 月 18 日	緊急学徒勤労動員方策要綱（閣議決定）。 学徒動員を 4 ヶ月継続動員とする。
1944 年 3 月 18 日	女子挺身隊制度強化方策要綱（閣議決定）。 地域・職業・学校別に行政上の指導勧奨という形で女子挺身隊への強制加入制度を確立する。
1944 年 8 月 23 日	女子挺身勤労令（勅令第 519 号）公布。
1945 年 2 月 25 日	決戦非常措置要綱（閣議決定）。
1945 年 3 月 7 日	決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱（閣議決定）。 中等学校程度以上の学徒動員は今後 1 年常時勤労と示された。

出典：大塚（1938）、文部省（1981）、後藤（1990）、阿部・佐藤（2000）を参考に筆者作成。

1938 年に国家総動員法が制定されてからは、女性も重要な労働力として日本政府の統制下に置かれる。1941 年の 11 月には国民勤労報国協力令が公布され、女子学生も勤労動員が始まった。この時点では、生徒・学生に対して工場などに年間 30 日以内の勤労奉仕が義務付けられた。しかし、勤労奉仕に「娘を出したがらない親も少なくなかったため」(阿部・佐藤 ,2000: 118)、1944 年 3 月、東条英機首相は女子学生の動員を女子挺身隊制度強化方策要綱として具体化し、1944 年 8 月女子挺身勤労令により法制化した。女子挺身勤労

[1] 後藤敏夫（1990）「戦時下の女性労働の一断面」『城西大学女子短期大学部紀要』7 巻 1 号、p.50 参照。

令は、12 歳以上の未婚・未就学・未就業者の女性を女学校同窓会などの団体・市町村単位で女子挺身隊として組織化し、工場などでの勤労労働に従事させるものであった。

1941 年から 1945 年は、戦況の変化に伴い、高等教育機関の生徒・学生を戦時動員に組む込む政策が次々と打ち出された。例えば、1941 年 10 月には、大学・高等専門学校の修業年限短縮の勅令が公布され、1941 年度卒業生は 3 ヶ月修業年限が短縮となった。1942 年度及び 1943 年度卒業生の修業年限も 6 ヶ月短縮となった。この勅令と並行して 1943 年 10 月には教育に関する戦時非常措置方策が閣議決定された。教育に関する戦時非常措置方策としては、文科系入学者の徴兵猶予の特典の停止、文科系私立専門学校の入学定員の二分の一削減、学校の統廃合、文科系学校の理科系への転換などが行われた[2]。1941 年から 1945 年は次々に決定される政策に各学校が対処していかねばならない時代であった。

このような戦時下における高等教育の特徴の一つは、女子高等教育の拡大期であったことである。1920 年には約 3,500 名であった女子学生は、1940 年には 7 倍の約 24,400 名に増加した[3]。そしてその女子学生の多くは、図 1 に明らかなように私立専門学校に在籍していた。「当時の女子にとっての最高学府とは事実上、専門学校レベルの教育機関のことであり、しかもその大半は私学の女子校」（伊藤 ,1999: 97）だったのである

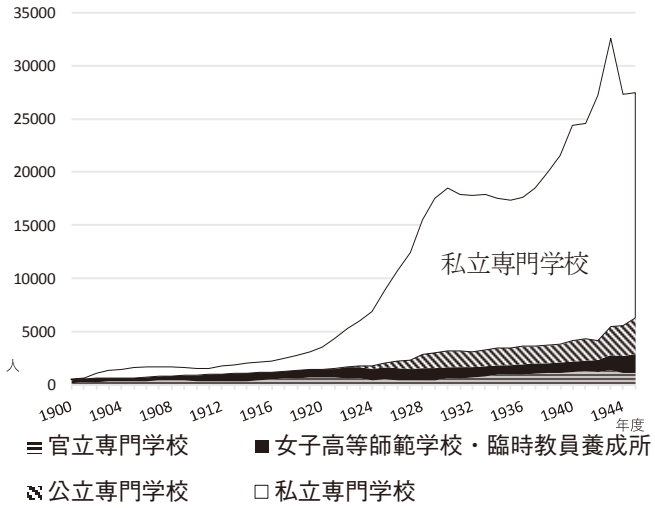

図 1　高等教育機関における女子就学者数の変遷

出典 :『文部省年報』各年度より算出して筆者作成。

この時期に女子高等教育が拡大した背景には二つの要因があった。第一の要因は、中等教員無試験検定の指定学校及び許可学校の卒業生には、中等教員無試験検定による教員資格が付与されたことである 。佐々木（2008）は、高等師範学校卒業者が授与される中等教員資格が私立女子専門学校を卒業することで得られるということが女子学生の進学意欲

[2] 天野郁夫（1993）『旧制専門学校論』玉川大学出版部、p.187 参照。
[3] 女子高等師範学校、臨時教員養成所、官公私立専門学校の女子学生の合計数。

を引き出し、在籍者数の確保に繋がったと指摘する。さらに「この資格認定をうけることが、私立の女子専門学校の運営上でも重要な事項」(佐々木 ,2008: 206) であったとも述べている。実際に、当時の教員検定合格者のうち大多数が無試験検定合格者であった。1932 年には無試験検定の「合格者数が一万名を越え」、「有資格中等教員供給上大きな役割を果たした」(牧 ,1971: 431)。

第二の理由は、進学が女子の工場での勤労労働を回避するための選択肢であったことである[4]。1939 年から国民徴用令が実施され、高等女学校を卒業した無職未婚の「女子も学校に在籍しないものは徴用されたので生徒の募集に不自由することはなかった」(神戸女学院百年史編集委員会編 ,1976: 248)。

このような急激な女子進学者の増加は、私立女子専門学校間の競争を激化させた。私立女子専門学校の経営者たちは、「経営的に競合する他校の動きに (中略) きわめて神経質に反応した。そこでは最高学府というステータスをもたないことの経営的ダメージが強く意識されていた」と伊藤 (1999: 104) は指摘する。専門学校は当時の「女学校のステータス・シンボル」(伊藤 ,1999: 103) であり、学校間の競争や女子中等教育卒業者の拡大によって私立女子専門学校は拡大していった。

こうした学校間の競争や経営を支えるものの一つは同窓会組織であった。中等教員資格の付与や女工回避のための進学という理由から、私立女子専門学校は生徒の確保に困ることはなかった。しかし、戦時下に既に設立されていた私立女子専門学校の「41 校は一様に經營難に困んでゐる。(中略) どの學校でも、新築増築の時には寄附金を募集する。因縁を辿つては富豪に援助を乞ひ、卒業生に分擔させ」(女子教育振興会編 ,1936: 26) ていた。女子教育振興会編 (1936: 27) は私立女子専門学校の経営難の理由を「教員の待遇は中等學校よりも良くしなければならない。その上教授上の参考品を豊富に準備しなければならない」ことや国からの財政的補助がないことから「經營上の困難は當然である」と指摘する。そのような状況のため、「学部の新設、施設設備の拡充などはすべて基金募集・借入などによったが、それには個々の学校がもつ社会的威信の高さや同窓会組織などが大きくものをいい、学校間格差を拡大する要因」(天野 ,1993: 252) となった。こうした戦前の同窓会に関する先行研究としては、天野 (2000,2013)、寺﨑 (1997)、原 (2016) が挙げられる。天野 (2000,2013) は戦前の同窓会の役割を「闘う同窓会」と表現し、各私立大学同窓会の大学昇格運動を明らかにした。寺﨑 (1997) は私立学校にとって同窓会は学校経営に直接影響を与える存在であると指摘する。原 (2016) は、戦前における私立大学同窓会が、大学経営の担い手や卒業生と大学との仲介役といった役割を果たすことによって、戦前には私立大学と同窓会との互恵関係が構築されていたことを明らかにした。さらに、女子高等師範学校の同窓会については、橘木 (2011) と舘 (1978) が分析している。橘木 (2011:

[4] 宮澤正典 (2011)『同志社女学校史の研究』思文閣出版、p.125 参照。

166）は、広島女子高等師範学校が大学昇格せず、奈良女子高等師範学校が大学昇格した要因は、同窓会である佐保会の強力な後押しと教育実績があったためと指摘している。舘（1978: 61）は東京女子高等師範学校の大学昇格運動は1923年に始まり、その開始期において同校同窓会である桜蔭会が「東京女子高等師範学校校長及び桜蔭会会員との連携をはかり、対外的には、奈良女高師同窓会佐保会と提携し、（中略）運動の高揚につとめた」と同窓会が果たした役割の大きさに言及している。他にも各大学の年史には、大学昇格の際に同窓会が果たした役割の大きさが論じられている。これらの先行研究から、同窓会組織の支援を得ることが官公私立を問わず戦前の学校経営にとって欠かせないものであったことが明らかになっている。

それでは、戦時下という非常時に同窓会はどのように私立女子専門学校を支え、私立女子専門学校は同窓会とどのような関係を築いていたのだろうか。戦時下の各学校の様子は、例えば、1944年及び1945年における同志社女子専門学校の状況を宮沢（1978,1979）が、立教学院の様子を奈須（2005）が明らかにしている。宮沢（1978,1979）は、同志社女子専門学校の入学試験の実施状況をはじめ学徒動員、終戦後の動員解除、授業再開に至るまでの様子を詳細なデータを用いて明らかにした。奈須（2005）は立教学院の勤労動員に関する状況をまとめた。奈須（2005）は、勤労動員等への出席状況が身体訓練の教育の一環となり、成績評価の対象に組み入れられてきたことに触れ、報国団の結成や勤労動員によって立教大学における学生の課外生活と教育の在り方が変容したと結論づけている。これらの先行研究は、現存資料の少ない戦時中の学校や生徒の様子を次世代に伝える重要な先行研究である。大学の自校教育や歴史のアーカイブにおいても貴重な資料となるだろう。しかし、戦時下において私立女子専門学校が同窓会にどのような支援を行い、私立女子専門学校が同窓会とどのような関係を築いていたのかについては、これまで十分に明らかにされてきたとは言い難い。そこで、本稿では、戦時下の私立女子専門学校と同窓会の関係を同窓会誌、学校史、私立女子専門学校の理事会及び経理資料などを中心に整理及び検討することにより、この課題の分析を試みる[5]。

本稿の課題を明らかにするため、分析の対象を、神戸女学院専門部（以下「神戸女学院」）と神戸女学院同窓会、同志社女学校専門学部（以下「同志社女専」）と同志社同窓会、梅花女子専門学校と梅花学園同窓会、金城女子専門学校とみどり野会に絞って分析する。上記4校とその同窓会を事例とする理由は次のとおりである。第一に、本稿が対象とする4校はキリスト教系の私立女子専門学校であり、女子高等教育の形成に重要な役割を果たしてきたと考えられるからである。表2は、公立及び私立女子専門学校の認可年度ごとに学問分野によって分類し、さらに宗教系の学校はその宗派も示したものである。その中でも

[5] 学校史は、後代に第三者の手によって編纂されたものであり第一次資料とは言い難い。しかし、戦時中の学校資料の多くは空襲で焼失しており、学校史も当時を知る一つの資料として参考とする価値があると考える。梅花女子専門学校は1945年12月の漏電による火災により資料の多くを焼失した。金城女子専門学校も1945年の名古屋大空襲において理事会の記録を除く多くの資料が焼失したとされている。

1900 年から 1919 年に設立した私立女子専門学校 11 校のうち、キリスト教系の私立女子専門学校が 7 校と大半を占めており、女子高等教育はキリスト教系の私立女子専門学校によって基礎が形成されたとも言える。こうした女子高等教育に関して実績を持つキリスト教系の私立女子専門学校とその同窓会の関係をみることにより、一定数輩出されてきた卒業生と母校・同窓会との関わりを明らかにすることができると考える。

表 2　公・私立女子専門学校認可別年度（太枠内の私立女子専門学校が分析の対象）

	宗教・文学系	文学系	文学・家政系	家政・裁縫系	その他	医歯薬系
1900年	(△青山女学院英文専門科)	津田英学塾	日本女子大学校			
｜	△神戸女学院専門部		帝国女子専門学校			
1919年	△東京女子神学専門学校					東京女子医学専門学校
	△同志社女学校専門学部					
	△聖心女子学院高等専門学校					
	△東京女子大学					
	△活水女子専門学校					
1920年	○京都女子高等専門学校		●福岡県立女子専門学校	東京女子専門学校		東洋女子歯科医学専門学校
｜	△梅花女子専門学校		●大阪府女子専門学校	共立女子専門学校		日本女子歯科医学専門学校
1934年	○千代田女子専門学校		実践女子専門学校	東京家政専門学校		帝国女子薬学専門学校
	△金城女子専門学校		樟蔭女子専門学校	和洋女子専門学校		帝国女子医学薬学専門学校
	○相愛女子専門学校		●宮城県立女子専門学校	椙山女子専門学校	日本女子体育専門学校	聖路加女子専門学校
	○大谷女子専門学校		●京都府立女子専門学校	安城女子専門学校	女子経済専門学校	大阪女子高等医学専門学校
	△広島女学院専門学校		●広島女子専門学校		女子美術専門学校	東京女子薬学専門学校
	△青山学院専門部女子部		●長野県女子専門学校		日本女子高等商業学校	昭和女子薬学専門学校
						共立女子薬学専門学校
						神戸女子薬学専門学校
1935年	□天理女子語学専門学校		●山口県立女子専門学校	大妻女子専門学校	帝国女子理学専門学校	●名古屋市立女子高等医学専門学校
｜	△日本基督教女子神学専門学校		●都立女子専門学校		京阪女子家政理学専門学校	●福島県立女子医学専門学校
1945年					東京女子厚生専門学校	●岐阜県立女子医学専門学校
					岡山清心女子専門学校	●京都府立医科大学付属女子専門部
					光華女子専門学校	●山梨県立女子医学専門学校
					東京女子体育専門学校	●北海道庁立女子医学専門学校
					明治女子専門学校	●秋田県立女子医学専門学校
					大阪女子経済専門学校	●高知県立女子医学専門学校
					京都女子厚生専門学校	静岡女子薬学専門学校

注：青山女学院は、1904 年に専門学校の認可を得るが、1918 年に廃止。
　　1933 年、家政科に対して専門学校として認可。
　　△キリスト教系、○仏教系、□他宗教、●は公立学校を示す。
出典：佐々木（2002）p.127 を一部修正して筆者作成。

第二に、女子教育や情報の中心地である東京都から離れた場所に設立された私立女子専門学校がどのように同窓会を学校の経営に巻き込んでいくのかをみるためである。私立女子専門学校は、東京都を中心に、京都府・大阪府・兵庫県・愛知県・広島県・長崎県に設立された。その中でも本稿は、京都府・大阪府・兵庫県（以下「京阪神地区」）・愛知県に学校を置く 4 校とその同窓会を対象とした。その理由としては、京阪神地区及び愛知県は、東京都に次いで女子教育の第二・第三の中心地であったことが挙げられる。

表 3 は、1920 年から 1940 年の全国・東京都・京阪神地区・愛知県における私立女子専門学校の生徒数と卒業生数を示したものである。東京都の生徒数・卒業生数が全体数の約 7 割を占めるものの、京阪神地区及び愛知県も年を追うごとに生徒数・卒業生数を増やしていることがわかる。

表 3　1920 年から 1940 年の全国・東京都・京阪神地区・愛知県における
私立女子専門学校の生徒数と卒業生数

	生徒数				卒業生数			
年	全国	東京都	京阪神地区	愛知県	全国	東京都	京阪神地区	愛知県
1920	2,112	1,823	270	0	325	300	19	0
1921	2,820	2,266	524	0	483	393	89	0
1922	3,656	2,945	666	0	663	535	123	0
1923	4,201	3,263	879	0	838	720	110	0
1924	5,086	3,655	1,353	0	947	715	222	0
1925	6,825	5,107	1,629	0	1,313	1,028	275	0
1926	8,382	6,240	2,032	0	1,917	1,478	420	0
1927	10,041	7,916	1,946	61	2,198	1,656	500	17
1928	12,618	9,527	2,907	79	3,315	2,518	755	13
1929	14,513	11,184	3,136	99	3,967	2,822	1,099	18
1930	15,317	11,861	2,907	181	4,212	3,276	873	43
1931	14,703	11,334	3,136	190	4,209	3,328	822	34
1932	14,726	11,179	3,186	235	5,423	3,048	859	50
1933	14,602	11,173	3,098	234	3,972	3,044	814	77
1934	14,119	10,798	3,139	221	3,930	3,010	803	69
1935	13,909	10,789	3,034	222	4,849	3,832	888	79
1936	14,094	10,881	2,935	287	4,950	3,937	819	143
1937	14,886	11,377	2,765	255	4,787	3,829	825	86
1938	16,271	12,275	2,807	302	5,281	4,117	1,013	105
1939	17,610	13,067	3,125	342	5,797	4,494	1,108	129
1940	20,317	15,459	3,552	483	6,923	5,313	1,334	188

注：1933 年から 1937 年までは卒業生数に予科及び研究科修了者を計上していない。
出典：文部省『文部省年報』各年度より筆者作成。

第三に、戦時下におけるキリスト教系の学校は寄附行為や建物・学校の名称に至るまで様々な変更が強制された[6]。そういった点では仏教系や宗教を母体としない学校と状況が異なる。戦時下のキリスト教会や学校が弾圧を受ける中、各学校はキリスト教を守りつつも、国策に対応せざるをえなかった。そこでキリスト教系の私立女子専門学校の同窓会も母校同様に活動の方向性や同窓会報の内容を変えざるを得なかった可能性がある。そのよ

[6] 横文字や「英・米」の入った建物名や学校名は敵国を連想するので、すべて変更を命じられた。例えば、同志社女専のジェームズ館は至恩館、プリンプトン館は寒梅館などに名称変更した（同志社大学人文科学研究所編 ,2006）。キリスト教系学校の中には、寄附行為の目的の項から「キリスト教」の文字を除くこともあった。戦時下におけるキリスト教の弾圧に関しては、藤尾（1972）、同志社大学人文科学研究所編（2005）、宮澤（2011）を参照されたい。

うな点を明らかにするために、本稿ではキリスト教系の私立女子専門学校とその同窓会に焦点を置いている。以下では、戦時下の私立女子専門学校と同窓会との関係を同窓会の活動、私立女子専門学校と同窓会との関係、卒業生と母校との関係から考察する。

２．戦時下の同窓会活動

戦時下という非常時において私立女子専門学校の同窓会活動とはどのようなものであったのだろうか。

この時期の私立女子専門学校の卒業生は、「家族を守り、銃後の戦士として、それぞれの立場において、女性としての役割を果たすのに精一杯」（梅花学園百十年史編集委員会編 ,1988: 524）であった。梅花学園百十年史編集委員会編（1988）によれば、梅花女子専門学校の同窓生の多くは、大日本婦人会[7]などをはじめとする婦人団体の働きに加わったとされる。神戸女学院同窓会も、第二次大戦中は同窓会総会も開かず、同窓会報の『めぐみ』も発刊しなかったという記録が残されている（神戸女学院百年史編集委員会編 ,1976）。しかし、各学校の資料や学校史を分析すると戦時下の同窓会は、次のような戦争遂行のための活動、生徒や卒業生のための活動、母校を支援するための活動を展開していた。

（１）戦争遂行のための同窓会活動

同窓会が戦争遂行のために行った活動としては、出征家族会員への慰問状発送[8]、陸軍軍医学校への慰問[9]、女子挺身隊の組織化、同窓会館の徴用などがあげられる。女子挺身隊の例としては、1943 年 12 月 21 日の神戸女学院常務理事会で、卒業生の女子挺身隊を組織したことを次のように報告している。

> 學園作業　目下入江家庭會代表幹事其ノ他ノ斡旋ニテ學園内ニ於テ作業場ヲ設ケテ同窓會員及在校生生徒ノ從事スベキ適当ナル作業物色中ナリ。此ノ爲<u>専門學校卒業生ノ挺身隊ヲモ組織セリ</u>[10]。

また、当時私立女子専門学校の校舎は工場や軍に徴用された。例えば、学校敷地内にあった神戸女学院や同志社女専の同窓会館も学校の校舎と同様に民間企業の作業場として徴用された。神戸女学院の同窓会館は川西航空機株式会社の医局として[11]、同志社女専の同窓会館は日本航空電気株式会社陸軍服ボタン付け作業場として徴用された[12]。このように

---

[7] 1942 年 2 月 2 日、政府や軍の主導で組織された婦人団体。
[8] 高井貞橘編（1943）『みどり野』金城女子専門学校報国団、第 31 号、p.17 参照。
[9] 清水有樂編（1941）『同窓会会報』同志社同窓会、第 71 号、p.13 参照。
[10]「一、庶務報告」「昭和十八年度十二月財團法人神戸女學院常務理事會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1943 年 12 月 21 日）神戸女学院所蔵、参照。下線は引用者による。
[11] 神戸女学院百年史編集委員会編（1976）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、p.263 参照。
[12] 同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会編（1978）『同志社女子部の百年』同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会、p.29 参照。

私立女子専門学校の校舎などが作業場として使用されてしまう一方で、礼拝を同窓会館で行い、私立女子専門学校は戦時下においてもキリスト教の精神を守ることに努めた。1945年3月に同志社女専と同法人の同志社高等女学校が発足した際も、公然と礼拝を守ることができる状況でなかったため、「有志生徒を糾合して、学校に隣接する同志社同窓会館を借用して課業の枠外でこれを行い、聖書講義も同所で毎週研修の時間を設けて継続した」（宮澤 ,2011: 58-59）とされる。

（２）生徒や卒業生のための同窓会活動

戦争遂行のための同窓会活動以外にも、生徒や卒業生のための同窓会活動も続けられた。このような活動として学校行事への参加、同窓会開催、同窓会報の発刊などが挙げられる。

学校行事への参加として、母校が主催する体育大会や宗教行事などに卒業生も参加した。金城女子専門学校は、音楽会や卒業式に卒業生が多数参加した。金城女子専門学校の体育大会・展覧会・演芸会開催の際には、卒業生は接待にあたったとされる[13]。1941年10月29日の梅花女子専門学校の体育大会にも卒業生は多数参加した[14]。神戸女学院でも、1941年10月14日の体育大会に約400名の保護者と卒業生が参観し盛大であった[15]。また、校内宗教運動として卒業生のために平安教会牧師による『日本人と福音の実践』と題した講演会を開いたことが財団法人神戸女学院常務委員会で報告された[16]。

卒業生同士の親睦を深める機会として、同窓会は同窓会総会や支部・卒業年度単位での同窓会を開催した。梅花女子専門学校では、1941年11月15日を戦前最後の同窓会として同窓会秋季総会が開催された。同志社同窓会報には、京都・大阪・神戸・東京・広島・ニューヨーク・大連・台北等などの支部総会や卒業年度ごとのクラス会の様子が掲載されている[17]。1942年3月に予定していた同志社同窓会定期総会は空襲警報のために延期し、同年9月24日卒業式終了後に新入会員歓迎会を兼ねて同志社同窓会定期総会を開催している[18]。終戦直後の1945年8月13日には同志社同窓会では、「新しい日本の出発にあたって女性のあり方」についての座談会を行った[19]。金城女子専門学校のみどり野会も1941年には、卒業年度ごとのクラス会・支部総会・秋季同窓会、1942年には同窓会役員会・阪神方面支部会・秋季同窓会・豊橋支部会・大連支部会を開催した。神戸女学院同窓会報『めぐみ』第30号（1941年1月）から第45号（1942年5月）には、毎号支部や卒業年度別の同窓会の実施報告が掲載されている（第41号・第44号除く）。時局柄、規模を縮小するなど支部での同窓会を控えることはあったが、戦時下においても卒業生同士の交流は

[13] 高井貞橘編（1943）『みどり野』金城女子専門学校報国団、第31号、p.17参照。
[14] 梅花学園百十年史編集委員会編（1988）『梅花学園百十年史』学校法人梅花学園、p.212参照。
[15]「一、庶務報告」「昭和十七年度十月財團法人神戸女學院常務理事會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1942年1月15日）神戸女学院所蔵、参照。
[16]「一、庶務報告」「財團法人神戸女學院理事會常務委員會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1942年1月12日）神戸女学院所蔵、参照。
[17] 清水有樂編（1941）『同窓会会報』同志社同窓会、第71号、pp.12-20、pp.33-39参照。
[18] 清水有樂編（1942）『同窓会会報』同志社同窓会、第72号、p.29参照。
[19] 同座談会にて神戸女学院卒業生2名が新しい時代の女性の在り方について話をした。
神戸女学院百年史編集委員会編（1976）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、pp.321-322参照。

続けられていた。

こうした同窓会や母校の様子は、同窓会報を通じて生徒、卒業生に伝えられた[20]。同窓会報には同窓会活動の内容、恩師・卒業生の近況報告（結婚・転居・訃報等）、学校記事が記されている。戦時下の同窓会会報の特徴は、上記の内容に加えて、生徒の勤労動員や神社参拝の様子、詔書の掲載、非常時における卒業生としての在り方を校長や教員が論じていることである。同窓会報の記事のタイトルの一例を挙げれば「皇國民の錬成と基督教」「米國よりの送金杜（ママ）絶と同窓會の總動員」「御嬢さん型（ママ）」などである。例えば同志社同窓会報における同志社高等女学校教頭末光信三の記事「御嬢さん型（ママ）」（末光 ,1942: 3）は、京都府の視察団に「同志社の女生徒は一見御嬢さんと云つた感じがする」と言われたことを例に出し、「お嬢さんは美しいかも知れない」が「戦時下において無意味の存在は許されない」と戦時下における女性のあるべき姿を論じている。

これらの同窓会報も紙の制約や政府などの統制に伴って廃刊もしくは戦後まで休刊することとなる。梅花学園同窓会報『この花同窓会誌』は、1939 年 7 月 15 日発行を最後として 1953 年まで休刊した[21]。同志社同窓会の『同窓会会報』は 1942 年 2 月をもって「用紙入手困難のため事実上の最終号とせざるをえなかった」（宮澤 ,2011: 231）。神戸女学院同窓会報『めぐみ』は 1943 年から 1947 年まで休止している。このことは 1942 年 5 月 14 日開催の財団法人神戸女学院理事会常務委員会で「めぐみノ廃刊」として「縣當局ノ〇（空白）アリ本月ヲ以テ『めぐみ』ハ廢刊スルコトヽナレリ」と報告された。また、みどり野会の記事を掲載していた金城女子専門学校学友会発行雑誌の『みどり野』は、1943 年まで発刊していたが「政府の統制により廃刊になった」（金城学院 ,1996: 395）。

（３）母校を支援するための同窓会活動

母校を支援するための同窓会活動は大きく二つにまとめられる。

第一に、母校の理事や評議員を同窓会から選出し、母校の経営に関わった。財団法人神戸女学院の理事 13 名のうち、4 名は「本法人が経営する学校の出身者の中から選ぶものとする」（神戸女学院八十年史編集委員会編 , 1955: 60）とされていた。1942 年 3 月 3 日開催の財団法人神戸女学院理事会常務委員会における資料「理事の任期一覧」には、同窓会選出理事として卒業生 4 名が名を連ねている[22]。財団法人梅花女子専門学校では、卒業生 5 名が同窓会選出理事として就任している[23]。同志社同窓会報（1942）では、卒業生 10 名が同志社理事 2 名、同評議員 8 名に当選したと報告されている[24]。

---

[20] 例えば、金城女子専門学校学友会発行の『みどり野』は 4,600 部を発行し、生徒・卒業生に配布した。高井貞橘編（1943）『みどり野』金城女子専門学校報国団、第 31 号、p.18 参照。

[21] 梅花学園百十年史編集委員会編（1988）『梅花学園百十年史』学校法人梅花学園、p.522 参照。

[22] 淺井ヤス・百崎四壽・西川悦・井深花。

[23] 菊池桂・水野重樹・安田幸子・山県富貴子・山崎千代。梅花学園百十年史編集委員会編（1988）『梅花学園百十年史』学校法人梅花学園、pp.3-6。梅花学園九十年小史編集委員会編（1968）『梅花学園九十年小史』梅花学園、p.363。

[24] 同志社理事　武間富貴、水崎しげ。同志社評議員　片桐芳子、加藤さだ、中目たき、竹原實恵、八馬廣子、田邊繁子、宮川増世、額賀千代。清水有樂編（1942）『同窓会会報』同志社同窓会、第 72 号、p.29 参照。

第二は、同窓会は母校に対して財政支援を行った。例えば、同志社同窓会は、同窓会の事業として母校の購買部を経営し、その利益を母校に納めた。神戸女学院では、1941 年 7 月 26 日在外資産凍結令を受けて、米国から神戸女学院への収入は絶たれることになったため、授業料の増額などで財源を確保することとなった[25]。この影響から、同学院の経常費不足を補てんする目的で、卒業生に対して寄附金の依頼状を発送することを 1942 年 4 月 9 日財団法人神戸女学院拡大理事会常務委員会にて決議している[26]。1943 年には神戸女学院同窓会も、同窓会の基本金及び会員の終身会費の積立金をすべて母校に提供し、母校の財政危機を支えた[27]。その他に支部単位でも収益事業を展開し、母校に寄付している。例えば 1943 年 11 月 14 日に神戸女学院同窓会神戸支部主催で音楽会を開催して、その収益 1,600 円を母校の基本金に寄付している[28]。

戦時下には「安定的な収入を生むだけのファンドの形成が、キリスト教系に限らず、わが国の私学にとって（中略）困難な課題」（天野 ,2013: 292）であった。そうした状況にあって、私立女子専門学校の同窓会は、同窓会から理事・評議員を選出して母校の経営に直接的に関与し、財政支援も行うという点で学校の経営上重要な存在であった。

３．私立女子専門学校と同窓会との関係

先述したように戦時下であっても同窓会は、卒業生に対して学校行事への参加や親睦の機会をつくり、母校への財政支援を行い、生徒・卒業生や母校への支援を行ってきた。一方で、戦時下における私立女子専門学校は同窓会に対してどのような関与や支援を行っていたのだろうか。

この点について、母校から同窓会に対する運営資金の提供といったような財政支援は、同窓会報の決算報告や私立女子専門学校の理事会及び経理資料からは確認できなかった。当時の私立女子専門学校は、潤沢な資金は持ち合わせていなかったことから同窓会に対する資金提供があったとは考えにくい。唯一学校から同窓会に対する支出が確認できたのは、神戸女学院である。1941 年 11 月 26 日財団法人神戸女学院協議委員会における同学院の収支に関する資料に同窓会に対する支出が確認できる。広告費として「めぐみ分担費」26,581 円、集会費として「同窓会デー費用」14,895 円を 1940 年度支出額として計上している[29]。また、神戸女学院は、戦災被害者となった同窓会員に対して見舞金を贈呈した。

---

[25]「(五) 學院ノ將來ニ關スル件　米國ニ於ケル資産凍結令に依リ今後米國ノ神戸女學院コーポレーションヨリノ送金ハ困難トナルベシ　之ニ對處スル爲メ左記ノ方法ヲ講ズルコト　ハ、授業料ヲ左ノ如ク増額スルコト」「決議事項」「財團法人神戸女學院擴大理事會常務委員會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1941 年 8 月 6 日）神戸女学院所蔵、参照。

[26]「(十) 同窓生ニ對シ寄附勸誘狀發送ニ關スル件」「決議事項」「財團法人神戸女學院擴大理事會常務委員會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1943 年 11 月 14 日）神戸女学院所蔵、参照。

[27] 神戸女学院百年史編集委員会編（1976）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、p.249 参照。

[28]「一、報告　同窓會神戸支部主催ノ音樂會（十一月十四日、神戸海員會館）ハ豫期以上ノ成功ヲ納メ、一千六百圓ヲ學院基本金中ニ寄附シタリ」「昭和十八年一月財團法人神戸女學院常務理事會決議録」『理事会議事録 昭和 18 年度より昭和 25 年まで』（1943 年 1 月 11 日）神戸女学院所蔵、参照。

[29]「協議委員會記録」（1941 年 11 月 26 日）『理事会議事録 昭和 18 年度より昭和 25 年まで』神戸女学院所

その額は家屋が全焼した教職員（独身者）が 100 円、生徒 50 円、同窓会員 20 円、「同窓會員ニテ死歿セル者」50 円であった[30]。

私立女子専門学校が同窓会に提供していたものは、卒業生と日本人教師による交流であった。戦時下には、日米関係の悪化により米国から日本への宣教師派遣は打ち切られ、外国人教師(宣教師)たちは帰米した。1939 年同志社女専では、「日米関係険悪化にともなって、クラップ、ヒバート、カーブ、トマスら同志社の外国人教師」（宮澤 ,2011: 259）が帰米した。金城女子専門学校の外国人宣教師も 1939 年から休暇帰米し、1940 年 11 月 6 日には同校に残っていた最後の宣教師であるマーガレット・アーチボルドも横浜港から龍田丸で帰米し、外国人教師は一人もいなくなった[31]。1941 年 8 月 13 日の財団法人神戸女学院理事会常務委員会では、「都合ニ依リ米國人教師ジー・ストウ、エス・エム・フィールドエイチ・ダブリユ・ハケツト、ダーリー・ダウンズ、エフ・ケリー、アリス・ケリー等ヨリ辭任申出アリタルモ休職ノ歸國トセシメタリ」と畠中院長より報告されている[32]。1941 年 8 月 28 日にはこれらの外国人教師は母国に引き上げ、終戦後まで戻ってくることはなかった[33]。

こうした状況下で同窓会との交流を図ったのは主に日本人教師であった。金城女子専門学校のみどり野会会長は、初代から第 6 代会長まで校長もしくは教員であった[34]。梅花学園同窓会会長も 1918 年から梅花女子専門学校校長伊庭菊次郎が同窓会長を務めている[35]。同志社女専の宣教師メリー・フローレンス・デントン[36]は同志社同窓会の評議員を、前校長松田道[37]も同会の名誉会長を務めた[38]。外国人教師は帰国してしまったが、それでも学校側としては積極的に同窓会へ校長や教員が参加している様子が確認できる。例えば、同志社女専校長片桐哲は、1941 年長崎で開催された全国女子専門学校長会議に出席する際に、門司、博多、熊本、長崎の同窓会支部に立ち寄り、卒業生との交流の機会を設けた。片桐校長は、卒業生と昼食を共にし、卒業生の勤務する高等女学校を訪問した。京都の母校から遠く離れた九州の卒業生は、思うように母校を訪ねることができないが、それでも校長に会うことにより、母校への愛情が再び湧いてきたことが同窓会報にて報告さ

蔵、参照。『KOBE COLLEGE General Ledger 1939-1942 No.2』神戸女学院所蔵にもめぐみ発刊費の記録あり。

[30]「(二）戦災被害者見舞金贈呈ニ関スル事後承認ノ件」「決議事項」「昭和二十年度四月財團法人神戸女學院常務理事會決議録」『理事会議事録 昭和 18 年度より昭和 25 年まで』(1945 年 4 月 13 日）神戸女学院所蔵、参照。

[31] 金城学院百年史編集委員会（1996)『金城学院百年史』学校法人金城学院、p.383 参照。

[32]「(二）米國人教師ノ歸國（畠中院長)」「財團法人神戸女學院理事會常務委員會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』(1941 年 8 月 13 日）神戸女学院所蔵、参照。

[33] 例えば、神戸女学院の外国人教師が戻ってくるのは終戦後の 1946 年 10 月である。

[34] 金城学院百年史編集委員会（1996)『金城学院百年史』学校法人金城学院、p.158 参照。

[35] 梅花学園九十年小史編集委員会編（1968)『梅花学園九十年小史』梅花学園、pp.362‐363 参照。

[36] 1888 年から 1947 年 12 月 24 日に永眠するまでの 59 年間、第 2 次世界大戦中も帰国せず同志社女専・同志社高等女学校構内に居住し、その全生涯を同志社の女子教育に注いだ女性宣教師。

[37] 同志社女学校初の女性校長。1931 年から 1933 年は同志社女専の校長。

[38] 清水有樂編（1941)『同窓会会報』同志社同窓会、第 71 号、p.48 参照。

れている[39]。同志社同窓会台北支部は同志社総長牧野虎次が台北を訪れた際に、講演会や同志社校友会との合同歓迎会を開催した[40]。金城女子専門学校校長市村與市も 1941 年 5 月 25 日からの朝鮮、満州、中国の教育視察の際には、奉天みどり野会、北京みどり野会、みどり野会天津支部創立総会の訪問を行い、「各地に散在する同窓生を訪問して、その生活を慰め、また同窓会支部を創設した」（金城学院百年史編集委員会 ,1996: 379）。神戸女学院畠中院長は、1941 年 2 月 10 日京都支部、同年 2 月 17 日神戸支部、同年 11 月 6 日東京支部の同窓会で学院の状況を報告し、卒業生と懇談している[41]。神戸女学院同窓会は、1942 年 4 月 17･18 日に第 10 回卒業生の同窓会を同窓会館で開催し、併せて全学院の歓迎会、教職員との懇談会を開いた[42]。このように私立女子専門学校側も同窓会に参加し、卒業生との交流を計った。学校の創設期から女子教育を支えてきた外国人宣教師と卒業生との交流は難しかったが[43]、総長や校長をはじめとする日本人教師により卒業生と学校との関係は繋ぎ止められていたといえよう。

４．卒業生が母校にもたらすもの－卒業生子女入学と卒業生教職員－

戦時下の私立女子専門学校にとって、同窓会を通して卒業生を支えることにどのような意味があったのだろうか。これまで見てきたように私立女子専門学校の卒業生は、集団で同窓会を組織し、財政面で母校の経営を支えてきた。しかし、卒業生は、個人としても卒業生子女入学、卒業生教職員という二つの側面で学校を支えていたのである。

第一に、私立女子専門学校の卒業生は、母校に入学者を送る重要な存在であった。少し時代を遡るが、1926 年 10 月 10 日に開催された神戸女学院創立五十年記念祝賀会の記録には次のように記されている。

> 記念祝賀會の三日間を通じて教職員同窓生及び同窓生の娘又は孫にあたる生徒は全員自己の姓名を記入した、リボンをつけるとなつてゐた。その色分けは次のとおりである。白章　教職員　紫章　同窓生　紅章　同窓生の娘又は孫[44]

この記録に表れるように、私立女子専門学校にとって重要な創立五十年記念祝賀会の際に、卒業生の娘または孫にあたる生徒を色分けによって明示した。このことから卒業生の

---

[39] 清水有樂編（1941）『同窓会会報』同志社同窓会、第 71 号、pp.12-15 参照。
[40] 前掲（1941）『同窓会会報』同志社同窓会、第 71 号、p.19 参照。
[41]「(一）院長ノ上京（畠中院長)」「昭和十六年度十一月常務委員会諸報告」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1941 年 11 月 11 日）神戸女学院所蔵、参照。
[42]「八、會合」「財團法人神戸女學院理事會常務委員會決議録」『財團法人神戸女學院理事會決議録』（1942 年 5 月 14 日）神戸女学院所蔵、参照。
[43] 1941 年時点では神戸女学院同窓会報『めぐみ』は外国人宣教師の元にも送られており、帰米した宣教師から同窓会にあてた手紙が神戸女学院同窓会報に掲載されている。神戸女学院同窓会（1941）『めぐみ』第 39 号、p.8 参照。
[44] 神戸女学院同窓会（1926）『めぐみ』臨時号、p.4。下線は引用者による。

娘もしくは孫が一定数生徒として在学していた、つまり卒業生子女入学があったという事実がわかる。同志社女専においても 1938 年に牧野虎次が同志社総長事務取扱に就任した際、次のような挨拶を同窓会報に掲載している。

> 此際自分が特に同窓會員諸姉にお願ひしたいことは諸姉の御子女を母校に送らるゝことである。殊に女學校に於ては諸姉の令孃方を送らるゝことは母校に對する愛校の精神を二代三代と繼承發展せしむらう所以であることを思ひ、諸姉の御協力を求めて已まない次第である。幸に我が母校には二代三代ー中には四代も引續いての縁故深き在學生のあることを見て、實に人意を強うする次第である。（中略）我が母校には親子相次いで母校を愛する多くの有為なる子女によつて満たされてこそ、我傳統的學風を益々發揮することが出來るのでないか[45]。

牧野総長事務取扱の挨拶から同志社女専に子女入学があったことがうかがえる。彼は、卒業生が娘を母校に入学させることによって、母校に対する愛校の精神を継承し、母校を発展させるものであると同窓会報を通じて卒業生に訴えている。また、金城女子専門学校は、1943 年 3 月、中国から留学生を特別に入学させる外国人特別生規定を学則第 7 章に新設した。当時、みどり野会の支部は中国にもあり、優秀な留学生を入学させるためには「大陸在住二百五十餘名の同窓姉妹方のご協力御援助を仰がなくてはならぬ」（市村 ,1943：6）と金城女子専門学校長市村與市は同窓会報で卒業生に呼び掛けている。このように、私立女子専門学校にとって卒業生は入学者を確保する一つのルートであった。

第二に、私立女子専門学校の卒業生は母校の教職員として学校経営を支える存在であった。私立女子専門学校の卒業生は、主に家庭に入るものが大半を占めていたが、教職員として働いた卒業生もいた。時期は遡るが、同志社女学校（当時の名称）においては 1888 年から 1891 年に就任していた同校校長フローレンス・ホワイトを卒業生が支えていた[46]。同校卒業生の広瀬ツネ、岡島テイ、林外浪に加え、神戸英和女学校[47]卒業生の梅田エイ、和久山キソの 5 人の教師（助教）である。彼女らは全員クリスチャンであり、英語が堪能であったため、日本語が十分ではないホワイト校長を支えたとされる。アメリカン・ボードの N. G. クラーク主事に対する 1890 年 3 月 31 日付の書簡でホワイト校長は、同志社女学校の卒業生について次のように希望を述べている。

---

[45] 牧野虎次（1938）「就任の挨拶」清水有樂編『同窓会会報』第 67 号、pp.1-2。下線は引用者による。
[46] 坂本清音編、ジュリエット・ウィンターズ・カーペンター訳（2012）『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876-1893 年）ーアメリカン・ボード宣教師文書をベースにしてー　下巻』同志社女子大学、pp.29-30 参照。
[47] 神戸女学院の当時の名称。

優秀な生徒にはこの課程表を修了した後、アメリカに留学させ、アメリカの設備や教育システムを体験させ、将来学校の責任者になる生徒を育てることには大賛成である。私もアメリカの学校におけるように、将来卒業生がこの学校で女性教師としてだけでなく、校長の地位に就くような働きをすることを願っている[48]。

神戸女学院では、「有望な卒業生の留学を奨励し、帰国後教鞭を取らせることによって、外国人教師招聘という悩みを解決しようとした」（畑中 ,2004: 23）。神戸女学院第一回卒業生の渡辺常氏が米国で理科を学んだ後、母校で教員として働いたことにはじまり、同学院の学校史や理事会決議録には教職員として卒業生の名前が残されている[49]。戦時下には、7 名の卒業生が教員として働いていたことが同学院の学校史から確認できた[50]。また、1942 年から 1945 年の財団法人神戸女学院常務理事会決議録には 6 名の卒業生を神戸女学院専門部及び高等女学部の教員として採用するという記録が残されている。さらに、1945 年 5 月 21 日開催の財団法人神戸女学院定時理事会の挨拶において畠中院長は母校教員に対する考えを次のように述べている。

生徒の教育も大切なことであるが、それよりも教職員の養成、向上のためを計ることが重要であらうと思ふ。彼等の研究及修養を助長するために努めねばならぬと思ふ。今日では教員の補充が非常に困難である。殊に基督教主義の学校として良教員を得るのに困難を感ずることは切実である。故に自ら自校教員の養成の方途を今にして講ぜぬならば、之は四年五年の後に重大化して来るのは火を睹るより明かである[51]。

この挨拶では、卒業生教員の養成の重要性が説かれており、同日の理事会において戦時の臨時収入の使途方針の一つとして、卒業生教員の養成のために使用することが決議された[52]。戦後神戸女学院が女子大学に昇格する際の大学設置認可申請書には、50 名の教員のうち 4 名が卒業生教員として名を連ねている[53]。また梅花専門学校と同系列である

---

[48] 前掲（2012）『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876-1893 年）－アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして－　下巻』同志社女子大学、p.32。下線は引用者による。
[49] 神戸女学院八十年史編集委員会編（1955）『神戸女学院八十年史』神戸女学院八十年史、p.307 参照。
[50] 生徒主事実生すぎ、舎監黒田治、塚本ふじ、井深花、藤田とき、曽木きく、丹部友。
前掲（1955）『神戸女学院八十年史』神戸女学院八十年史編集委員会、p.74、308、314 参照。
神戸女学院百年史編集委員会編（1976）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、p.322 参照。
[51]「畠中院長挨拶」「昭和二十年度五月財團法人神戸女學院定時理事會決議録」『理事会議事録 昭和 18 年度より昭和 25 年まで』（1945 年 5 月 21 日）神戸女学院所蔵、参照。下線は引用者による。
[52]「戦時臨時収入ノ使途ニ関スル決議」「戦時臨時収入金使途ノ方針（三）教職員及傭員將來ニ於ケル福利増進及母校出身教員ノ養成、一般教職員ノ資質ノ向上ヲ計ルコト」「昭和二十年度五月財團法人神戸女學院定時理事會決議録」『理事会議事録 昭和 18 年度より昭和 25 年まで』（1945 年 5 月 21 日）神戸女学院所蔵、参照。
[53]「大学設置認可申請書記載様式」『大学設置認可申請書昭和二十三年』神戸女学院所蔵、参照。

梅花高等女学校の教職員 61 名のうち、4 名が梅花女子専門学校英文科の卒業生である[54]。このように戦前及び戦時下には、高等教育を受けた女性は母校の卒業生教職員として母校を支えた[55]。それと同時に私立女子専門学校では卒業生の校長や教員の養成が課題となっていたのである。

5．考察

本稿では、戦時下における私立女子専門学校と同窓会との関係性という課題を明らかにするため、私立女子専門学校の同窓会活動の内容、私立女子専門学校による同窓会への関与状況を中心に分析を行った。分析の結果、私立女子専門学校と同窓会との関係には卒業生も関与し、図 2 のような互恵関係を構築していたことが明らかになった。

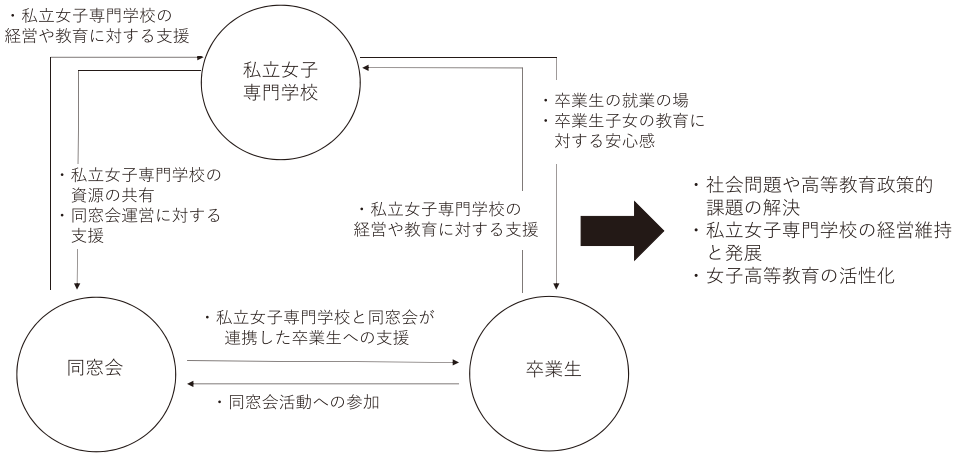

図 2　戦時下における私立女子専門学校と同窓会の互恵関係

出典：筆者作成。

戦時下という非常時においても私立女子専門学校教員の同窓会への参加や、同窓会報を通じて校長や教員が戦時下の卒業生としての在り方やキリスト教についての考え方を明示するなど、学校側は同窓会の運営に対して支援を行った。私立女子専門学校と同窓会は、教員という資源を共有していたのである。そのような支援は、卒業生の母校での思い出を呼び起こし、卒業生による同窓会活動や海外及び日本全国の卒業生を支えた。母校と同窓会との連携によって、卒業生同士や恩師との親睦を深めるべく、同窓会は学校行事への参加やクラスや地域単位での同窓会を開催して、戦時下の卒業生の精神的な支えとなった。そして卒業生は、購買部の運営や寄付金募集といった同窓会活動によって母校に財政支援を行い、母校の経営を支えた。卒業生個人としても、自分の娘を母校に入学させたり、自

[54] 1937 年時点。創立六十年史編纂委員編（1937）『創立六十年史』梅花女子専門学校・梅花高等女学校、pp.292-298 参照。
[55] 他にも、1931 年の東京女子大学には卒業生教職員 21 名によって構成されている在校職員卒業生会がある。帝国大学初の女子正規入学者の黒田チカ、牧田らくは母校の東京女子高等師範学校に、丹下ウメは母校日本女子大学の教員として勤めた。

身が母校の教職員として勤めることによって、母校の教育を支えた。母校側も卒業生教員の養成を図り、卒業生へ子女入学を促した。つまり、戦時下の私立女子専門学校は、同窓会と卒業生との互恵関係を築いていたといえる。戦時下において私立女子専門学校が同窓会と卒業生とこのような互恵関係を築く意味は、次の三つにまとめられる。

第一に、私立女子専門学校と同窓会が互恵関係を築くことによって、戦時下の日本社会にも貢献した。本稿では、同窓会は卒業生や母校のための同窓会活動に加えて、戦争遂行のための活動を展開していたことが明らかになった。それは私立女子専門学校の学徒動員に卒業生が加わったり、中国などの各地に支部を設立したことに表れている。同窓会報に生徒の勤労動員や神社参拝や詔書など戦争に関する記事が掲載されたのも、この時代の同窓会会報の特徴といえよう。私立女子専門学校の同窓会報は生徒、卒業生に広く配布されており、戦況の広報活動と戦争に対する理解を深める手段となった。私立女子専門学校と同窓会が互恵関係を築くことによって、卒業生は結束力を増し、戦争遂行に向けた日本の力となった。

第二に、私立女子専門学校にとって同窓会と互恵関係を築くということは、先行研究が指摘したように私立女子専門学校の存続を支えるものであった。私立女子専門学校の校長や教員は同窓会報に記事を寄せたり、同窓会に参加し母校の状況を伝えるなど、同窓会に積極的に関与した。母校の教員と同窓会との交流が同窓会活動に励む卒業生を支えたのである。同窓会側も同窓会から理事を選出し、母校の経営に直接関与したり、母校に対して財政支援を行うなどして、母校の存続を支えた。同窓会報も母校の状況を掲載し、母校の広報的役割を果たしていた。

第三に、女子高等教育にとって私立女子専門学校と同窓会との互恵関係は、女子高等教育を活性化させるものであった。戦時下の日本においてキリスト教系の学校は様々な弾圧や制約を受けた。そのような状況にも関わらず、本稿では、キリスト教の文化の中で学んできた卒業生が娘を母校に入学させたり、母校の教職員として働き、母校の経営と生徒の教育を支えてきた。キリスト教を理解した教員の確保を課題とした私立女子専門学校も、卒業生子女入学の促進や卒業生教員の養成に努めた。このように卒業生が母校に関与することよって学校文化の継承、生徒数の確保、キリスト教に対する理解・普及が行われてきた。同窓会はこうした女子高等教育を支える卒業生と母校をつなぐ存在であり、私立女子専門学校と同窓会と卒業生との互恵関係は、当時の女子高等教育を活性化する役割を担ったといえるだろう。

６．今後の課題

今後の課題として次の三つが挙げられる。第一に、本稿では京阪神地区及び愛知県のキリスト教系の私立女子専門学校を取り上げた。戦時下における私立女子専門学校同窓会の

全体像の分析のためには、対象を広げて全体を俯瞰することが必要である。それによって、戦時下の日本における私立女子専門学校と同窓会の関係がより具体的に明らかになる。第二に、本稿では私立女子大学の前身である私立女子専門学校とその同窓会の関係に焦点を当てたが、戦前と戦後においても同様の分析を行い、現在に至るまでの私立女子大学と同窓会における関係性の変容を明らかにすることが求められる。第三に、本稿は対象を私立女子専門学校とその同窓会としているが、今後は女子高等師範学校とその同窓会の関係も含めて検討したい。第二と第三の課題を解決することによって、女子大学と同窓会の関係を通して高等教育全体の在り方に新しい知見が得られると考える。これらについては今後の課題としたい。

謝辞

資料の閲覧及び照会にあたっては、各大学の史料室・社史資料センター・図書館・同窓会のご厚意を得た。記して感謝申し上げる。

参考文献

阿部恒久・佐藤能丸（2000）『通史と史料　日本近現代女性史』芙蓉書房出版

天野郁夫（1993）『旧制専門学校論』玉川大学出版部

天野郁夫（2000）「大学の同窓会－歴史と展望」民主教育協会『IDE 現代の高等教育』419 号、pp.5-11.

天野郁夫（2013）『高等教育の時代（上）－戦間期日本の大学』中公叢書

市村與市（1943）「一年の回顧」高井貞橘編『みどり野』金城女子専門学校報国団、第 31 号、pp.2-8.

伊藤彰浩（1999）『戦間期日本の高等教育』玉川大学出版部

伊藤彰浩（2014）「政府と私立大学 : 戦間期から戦時期へ (2)」名古屋大学大学院教育発達科学研究科『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第 61 巻 2 号、pp.25-41.

大塚一朗（1938）「戦時における女子労働」京都大学『経済論叢』46 巻 3 号、pp.473-479.

金城学院百年史編集委員会（1996）『金城学院百年史』学校法人金城学院

神戸女学院大学所蔵『財團法人神戸女學院理事會決議録』

神戸女学院大学所蔵『大学設置認可申請書昭和二十三年』

神戸女学院大学所蔵『理事会議事録　昭和 18 年度より昭和 25 年まで』

神戸女学院大学所蔵『KOBE COLLEGE General Ledger 1939-1942 No.2』

神戸女学院同窓会（1926）『めぐみ』臨時号

神戸女学院同窓会（1941）『めぐみ』30 号～ 40 号

神戸女学院同窓会（1942）『めぐみ』41 号～ 45 号

神戸女学院八十年史編集委員会編（1955）『神戸女学院八十年史』神戸女学院八十年史編集委員会
神戸女学院百年史編集委員会編（1976）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院
後藤敏夫（1990）「戦時下の女性労働の一断面」『城西大学女子短期大学部紀要』7 巻 1 号、pp.49-69.
坂本清音編著、ジュリエット・ウィンターズ・カーペンター訳（2012）『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876-1893 年）－アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして－　下巻』同志社女子大学
佐々木啓子（1996）「戦前期女子高等教育と中等教員無試験検定」東京大学大学院教育学研究科『東京大学大学院教育学研究科紀要』36 巻、pp.205-215.
佐々木啓子（2002）『戦前期女子高等教育の量的拡大過程－政府・生徒・学校のダイナミクス－』東京大学出版会
佐々木啓子（2008）「伝統的規範から脱却した新中間層の女性たち―戦前期日本における女子高等教育拡大のメカニズム」香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育－機会拡張と社会的相克』pp.196-223、昭和堂
清水有樂編（1941）『同窓会会報』同志社同窓会、第 71 号
清水有樂編（1942）『同窓会会報』同志社同窓会、第 72 号
女子教育振興会編（1936）『女子高等教育の經營問題』女子教育振興会
末光信三（1942）「御嬢さん型」清水有樂編『同窓会会報』第 72 号、p.3.
創立六十年史編纂委員編（1937）『創立六十年史』梅花女子専門学校・梅花高等女学校
高井貞橘編（1942）『みどり野』金城女子専門学校学友会、第 30 号
高井貞橘編（1943）『みどり野』金城女子専門学校報国団、第 31 号
舘かおる（1978）「東京女子高等師範学校の大学昇格運動－戦前日本の女子大学構想」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 31 号、pp.59-78.
橘木俊詔（2011）『女性と学歴－女子高等教育の歩みと行方』勁草書房
寺﨑昌男（1997）「大学の歩みと同窓会・校友会」日本私立大学連盟『大学時報』46 巻 253 号、pp.30-33.
同志社社史資料センター所蔵『同志社女子大学設置認可申請書　昭和二十三年』
同志社社史資料センター所蔵『同志社理事会書類綴　昭和十九年度』
同志社社史資料センター所蔵『同志社理事会書類綴　昭和十九年～二十一年』
同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会編（1978）『同志社女子部の百年』同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会
同志社大学人文科学研究所編（2005）『特高資料による戦時下のキリスト教運動 2』オンデマンド版
同志社大学人文科学研究所編（2006）『同志社理事会記録　摘録 (2)1938 年～ 1955 年』

奈須恵子（2005）「立教大学における教育と戦争－戦時動員と教育の変容の過程に着目して－」立教大学立教学院史資料センター『立教学院史研究』第 3 号、pp.74-115.
梅花学園九十年小史編集委員会編（1968）『梅花学園九十年小史』梅花学園
梅花学園百十年史編集委員会編（1988）『梅花学園百十年史』学校法人梅花学園
畑中理恵（2004）『大正期女子高等教育史の研究：京阪神を中心にして』風間書房
原裕美（2016）「戦前における私立大学校友会の役割－関西地区私立大学を中心に－」名古屋大学高等教育研究センター『名古屋高等教育研究』16 号、pp.155-175.
藤尾正人（1972）「戦時下キリスト教迫害関係資料について」国立国会図書館『参考書誌研究』5 号、pp.1-18.
冨士原雅弘（1998）「旧制大学における女性受講者の受容とその展開―戦前大学教育の一側面－」日本大学教育学会『教育学雑誌』第 32 号、pp.76-91.
保々房（1931）「在校職員卒業生会」東京女子大学同窓会『同窓会誌』第 5 号、p.89.
牧野虎次（1938）「就任の挨拶」清水有樂編『同窓会会報』第 67 号、pp.1-2.
牧昌見（1971）『日本教員資格制度史研究』風間書房
宮沢正典（1978）「昭和 19,20 年における同志社女子専門学校 (1)」同志社女子大学『同志社女子大學學術研究年報』29 巻 3 号、pp.393-416.
宮沢正典（1979）「昭和 19,20 年における同志社女子専門学校 (2)」同志社女子大学『同志社女子大學學術研究年報』30 巻 3 号、pp.293-309.
宮澤正典（2011）『同志社女学校史の研究』思文閣出版
文部省『文部省年報』各年度
文部省（1981）『学制百年史』帝国地方行政学会